

次の文章【A】・【B】は、昭和十四年に書かれた「富嶽百景」の一部で、作者が見た富士山の様子について書かれた部分です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【A】

十国峠じゅうこくとうげから見た富士山は、高かった。あれは、よかった。はじめ、雲のために、頂が見えず、私は、その裾の勾配こうばいから判断して、たぶん、あそこあたりが、頂であろうと、雲の一点にしろしをつけて、そのうちに、雲が切れて、見ると、ちがった。私が、あらかじめしろしをつけておいたところより、その倍も高いところに、青い頂が、すつと見えた。おどろいた、というよりも私は、へんにくすぐったく、げらげら笑った。やっていやがる、と思った。人は、完全のたのもしさ①に接すると、まず、だらしなくげらげら笑うものらしい。全身のネジが、他愛なくゆるんで、これはおかしな言い方であるが、帯紐おびひもといて笑うといったような感じである。諸君が、もし恋人と逢あって、逢ったとたんに、恋人がげらげら笑いだしたら、慶祝けいしゆくである。必ず、恋人の非礼をとがめてはならぬ。恋人は、君に逢って、君の完全のたのもしさを、全身に浴びているのだ。

(太宰治「富岳百景」より。一部表記等を改めたところがある。【B】も同じ。)

(注1) 十国峠 静岡県伊豆半島北部にある峠。標高七六五メートル。眺望の名所として知られる。

(注2) 帯紐をとく 安心して気をゆるす。(帯紐は着物を着るときに使う帯と紐のこと。)

(注3) 慶祝 よろこび祝うこと

【B】

その夜の富士がよかった。夜の十時ごろ、私は、眠れず、外へ出てみた。おそろしく、明るい月夜だった。富士が、よかった。月光を受けて、青く透きとおるようで、私は、狐きつねに化かされているような気がした。富士が、したたるように青いのだ。燐りんが燃えているような感じだった。鬼火。狐火。ほたる。すすき。葛くずの葉。私は、夜道を、まっすぐに歩いた。下駄げだの音だけが、自分のものでないように、他の生きもののように、からんころんからんころん、とても澄んで響く。そつと、振りむくと、富士がある。青く燃えて空に浮かんでいる。私は溜息ためいきをつく。維新の志士。鞍馬天狗くらまてんぐ。私は、自分を、それだと思った。ちよつと気取って、ふところ手して歩いた。ずいぶん自分が、いい男のように思われた。ずいぶん歩いた。

(注1) 燐 非金属元素の一つ。うす黄色で、火がつきやすい。

(注2) 鬼火 しまった土地などで青くひとりで燃える火。きつね火。

(注3) 葛 秋の七草の一つ。野山に生えるつる草で、紫色の花が咲く。

(注4) 志士 自分を犠牲にして国のためにつくそうとする志をもった人。

(注5) 鞍馬天狗 京都の鞍馬山に住んでいたと伝えられる天狗。牛若丸に兵法を教えたという。

(注6) ふところ手 両手を着物と胸の間に入れてのこと。



1 ～～～線部①「たのもしさ」、～～～線部②「他愛なく」とありますが、この文章におけるそれぞれの意味として最も適切なものを、ア～エから選びなさい。

- ① たのもしさ
- ② 他愛ない
- ア たくましい様子
イ がんこな様子
ウ 楽しみである様子
エ 裕福である様子
- ア とくに意味がない
イ はりあいがいい
ウ 正体がない
エ つまらない
- ②
- ①

2 【A】・【B】の文章にはどのような富士山の様子が描かれていますか。最も適切なものを、ア～エからそれぞれ選びなさい。

- ア 思いがけず目にした富士山の神秘的で現実離れた美しさ
イ 時代を超えて変わらない姿を見せる富士山に対する信頼
ウ そこで生きる様々な生物に対する富士山の包容力の大きさ
エ 自分の予想をはるかに超えた壮大な富士山に対する感動
- B
- A

3 仁美さんたちは、この文章で特徴があると感じた表現について話し合っています。次の【話し合いの一部】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【話し合いの一部】

この文章は、すごくリズムがいいね。句点が多く使われていることと、文末が「た」で終わる文が多いこと、それから、一つ一つの文を見ると、が重ねられているからかな。



それに、富士山を見た「私」の反応や想像もおもしろいね。比喻がとてもユニークで、富士山を見ている「私」の様子が目に浮かぶよ。



(1) 【話し合いの一部】のに当てはまる適切な言葉を書きなさい。

(2) ———線部「富士山を見た『私』の反応や想像もおもしろい」とありますが、あなたは、富士山を見た「私」についてのどのような表現がおもしろいと思いますか。【A】・【B】のうちどちらかを選び、次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。

条件 1 には、選んだ文章の記号を書くこと。

条件 2 本文を引用して書くこと。引用する部分にはかぎかっこ「」でくくること。

条件 3 おもしろいと思った理由を明確にして、三文で書くこと。

選んだ文章

--	--	--	--	--	--

問題にひらく

「読むこと」 文学的文章を読み比べる問題 （「富嶽百景」を読む）

読んでいる文章に分からない語句があった場合、前後の文章とのつながりや漢字の意味を手掛かりに語句の意味を推測し、それを文脈に戻すことで文章に書かれている内容を大筋でつかむことができるようになることが大切です。そのためにも、日ごろから辞書を引いて意味を確かめる習慣を身に付けるようにしましょう。

文学的文章を読むことにおいては、内容だけでなく、表現の仕方についても取り上げ、読んで考えたことについて意見を交流し、互いの考えを深める学習活動を取り入れるようにしましょう。

○ 解答は、問題用紙に記入します。言葉や文章で答える問題は、条件に注意して書くようにしましょう。

○ 解答を読んで、自分で答え合わせをすることもできます。文章で書く問題は、解答の例文を参考にしましょう。

解答



24

1 ① ア

② ウ

2 A エ

B ア

3 (1) 短い文（短文）

(2) (例)

A

予想を超えて倍も高いところにあつた頂を見て、「やっていやがる」と思い、「へんにくすぐったく、げらげら笑つた」というところ。いい意味で予想を裏切られると、そんな気持ちになるのかなと思つたからです。また、作者の愉快でたまらない気持ちがまっすぐに伝わってきたからです。

(例)

B

月光に青く輝く富士山を見ているうちに、自分のことを「いい男のように」思い、「ちよつと気取つて、ふところ手して歩いた」というところです。富士には人を不思議な世界に引き込む魅力があるのかなと思つたからです。また、青い富士の描写がとても美しく心に残つたからです。

* これ以外の内容についても、おもしろいと感じた表現を引用し、そう感じた理由を書いていけばよい。

* 三文で書いていること。